

平成 21 年度結核患者接触者健診における QFT-TB2G 法による検査状況

宮野 高光 田中 寛子 末永 朱美 国井 悦子
花木 陽子 毛利 好江 石村 勝之 池田 義文*
笠間 良雄

はじめに

結核は、本邦において多く発生している細菌感染症の一つである。結核菌は、飛沫および空気感染し、潜伏期間が長いことから、感染者や患者の早期の発見が難しく、公衆衛生上重要な問題となっている。

患者および感染者の診断には、長年、ツベルクリン反応が使用されてきたが、近年開発されたクオンティフェロン(QFT)法は、ツベルクリン反応の欠点である BCG に対する反応性がないうことから、潜在性結核患者診断の補助手段として有効性が評価され、普及してきている。

当所においても、行政検査対応として QFT 検査を実施している。今回は、平成 21 年度に当所で結核患者接触者健診として実施した QFT 検査の実施状況と検査結果について報告する。

方 法

1 材料

平成 21 年度に搬入された結核患者接触者の血液 257 検体(62 事例)を供試した。

2 検査方法

検査は、クオンティフェロン TB-2G 検査キット(cellestis 社製)を用い、常法に従い実施した。

3 判定結果の検討

判定結果について、年代別、接触状況別に集計し検討した。

結 果

1 検体の判定結果

接触者血液 257 検体の結果については、陽性 22 検体(8.6%)、判定保留 21 検体(8.2%)、陰性 211 検体(82.1%)、判定不可 3 検体(1.2%)であった。

2 事例ごとの判定結果

家庭、事業所、医療機関などの接触者について QFT 検査を行った 62 事例のうち、陽性または判定保留が認められた事例は 16 事例(25.8%)であった。

内訳は、陽性と判定保留がある事例は 3 事例(4.8%)、陽性がある事例は 6 事例(9.7%)、判定保留がある事例は 7 事例(11.3%)で認められた。

3 年齢分布

検査を行った接触者は 5 歳～63 歳で、平均年齢は 33.8 歳であった。接触者全体の年齢分布は 20 代が最も多く、33.5%であった。次に 30 代、40 代、50 代の順に多かった(図 1)。

陽性の年齢分布は、40 代が最も多く、50 代、20 代と 30 代の順であった(図 2)。

判定保留の年齢分布は、20 代が最も多く、30 代、50 代の順であった(図 3)。

4 接触状況

被検者の接触状況を図 4 に示した。その内訳は同僚 34.2%、医療従事者 20.6%、別居家族 19.5%の順に多かった。

接触状況別の判定結果を表 1 に示した。陽性検体数は 22 検体で、その内訳は、同僚 9 検体(40.9%)、同居家族 5 検体(22.7%)、医療従事者 3 検体(13.6%)の順に多く、学校関係者、介護職員、施設同居、その他では陽性は認められなかった。

区分別に内訳を見ると、同僚 85 検体では陽性 9 検体(10.6%)、判定保留 10 検体(11.8%)であった。同居家族 33 検体では陽性 5 検体(15.1%)、判定保留 3 検体(9.1%)であった。医療従事者 53 検体のうち陽性は 3 検体(5.7%)、判定保留 2 検体(3.8%)であった。

* : 退職

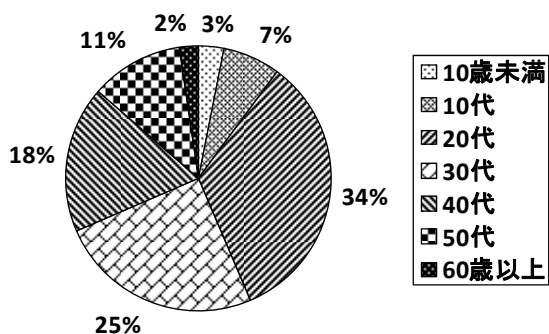


図1 被検者年代別割合

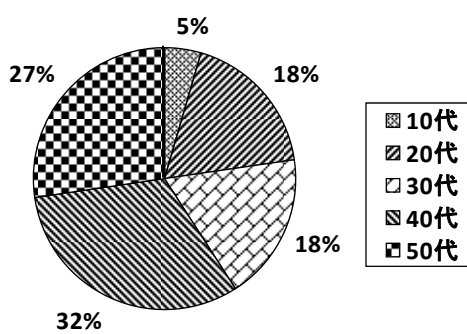


図2 陽性者年代別割合

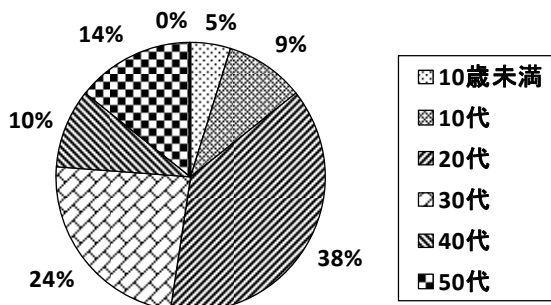


図3 判定保留者年代別割合

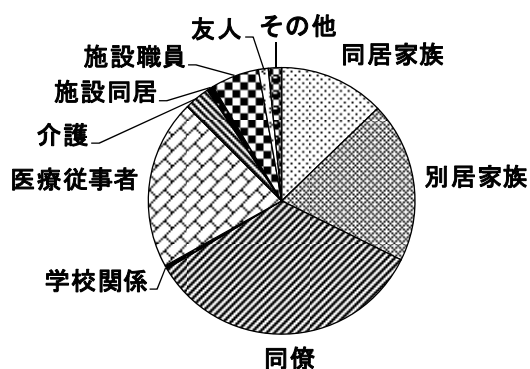


図4 接触状況別割合

表1 接触状況別判定結果(検体数)

	陽性	判定保留	陰性	計
同僚	9	10	66	85
同居家族	5	3	25	33
医療従事者	3	2	48	53
施設職員	2	0	13	15
友人	2	1	0	3
別居家族	1	3	46	50
学校関係	0	0	1	1
介護	0	0	8	8
施設同居	0	0	2	2
その他	0	2	2	4
計	22	21	211	254

(判定不可検体を除く。)